

『やんばるからの伝言』

2015年10月22日

沖縄の「普天間基地」は宜野湾市の真ん中にあり、「世界一危険な基地」と言われている。この基地を撤去することに日米は合意した。喜ばしいことである。ところが、普天間基地に代わる基地を建設するということになり「辺野古基地」建設が浮上した。だから、基地の移設という言葉が使われた。従来の基地は戦後、米軍の銃とブルドーザーで強制的に作られたものである。辺野古基地ができれば、沖縄県民が受け入れ、同意して作られるものとなる。県民は同意せず、移設ではなく、「新基地」建設と表現し、翁長県知事はじめ、県民は総力を上げて反対運動を展開している。「辺野古新基地」建設に関しては、様々な報道がなされ、多くの人々に関心を持たれる状況にある。

一方、「高江ヘリパッド基地」建設に関しては、あまり報道されていない。私も十分に知らなかった。今回「沖縄平和の旅3日間」に参加して、詳しい事情を知らされた。1998年に、基地の整理縮小を協議した「最終報告」で、面積にして約5千ヘクタールの返還が発表された。しかし、返還計画の多くが県民の望まない「移設条件付き」であった。沖縄北部にある「北部訓練場」は7千8百ヘクタールもの広大な訓練場で、ジャングル戦闘訓練が行われている。ベトナム戦争時代、住民はベトナム兵の役目で刈り出されたという。訓練場の半分ほどが返還されるということになったが、22ヶ所のヘリパッド（ヘリコプター離着陸帯）を6ヶ所に移設することが条件とされ、その移設先が「高江」になった。高江新ヘリパッド建設に住民たちはすぐに区民総会を開いて全会一致で反対決議を採択した。政府は反対決議の民意を無視して、2007年に工事の着工を強行した。

やんばる（山原）の森は亜熱帯性の常緑広葉樹が生育し、本島の生活用水の60%を供給するほど豊富な水源地でもある。森には国の天然記念物、絶滅危惧種の動物が生息している。ヤンバルクイナは飛べない鳥として知られている。様々な小鳥、動物が住み、四季折々の花々が咲く。自然豊かな所で、憧れて住み着く人々もいる。その森に「未亡人製造機」と言われるオスプレイが飛び交うことになる訳である。基地は少し縮小するが、尖鋭化した巨大兵器による事故の被害は計り知れない。米兵による事件は減ることはない。

伊佐真次氏は「ヘリパッドいらない住民の会」の共同代表の一人で、ただ、平穏な暮らしを守りたいと、当初から現在に至るまでの反対運動を『やんばるからの伝言』と題して写真付きで著した。住民たちは話し合い、工事阻止を目指し24時間体制で「座り込み」をしている。その座り込みは、伊江島の阿波根昌鴻氏の「非暴力不服従運動」に倣い、素手で手も耳より上にあげないこと、言葉も静かに話すことと徹底している。それでも、国は住民が萎縮することを狙い、「交通妨害」としてスラップ訴訟（恫喝裁判）に訴えた。伊佐氏は最高裁まで闘い敗訴したが、希望を失わず、ユーモラスにしたたかに闘いを続けている。食事を分かち合い、歌あり踊りありの明るい座り込みで、全国からの支援が寄せられている。米軍統治に抵抗した政治家・瀬長亀次郎氏は「弾圧は抵抗を呼ぶ。抵抗は友を呼ぶ」と言ったが、友を広げる運動を展開している。

ジャーナリストの布施祐仁氏は下記の言葉を寄せている。「日米両政府に辺野古新基地と高江ヘリパッド建設を断念させるためには、現場のたたかいとともに日本の政治状況を変える必要があります。この問題は、高江や辺野古の住民だけの問題でも、沖縄県民だけの問題でもありません。真に問われているのは、日本の民主主義と安全保障であり、主権者である私たち一人ひとりの選択と行動です。」